

長屋門

江戸時代（1603—1867）の加賀藩（金沢を中心とする封建時代の石川）では、武家の屋敷は1つ、あるいは複数の入り口が設けられた土壁で囲まれていました。どのような形式の門が許可されるかは、階級によって決定されますが、このうちの1つは「長屋門と呼ばれました。これは、中級以上の侍に許された、居住空間が中にある門でした。

長屋門は、その名をその構造に負っています。伝統的な日本の長屋（付属的な建物と平屋から成る長い建物を指す）と似た構造をしています。しかし、門が、その中に埋め込まれていました。奉公人たちはしばしばこの中に住んでいました。入居者の出入りを慎重に監視し、入口を守ることは、彼らの義務でした。

高田家の長屋門はもともと1861～1864年の間に建てられたものであると考えられています。現在は金沢市が所有しており、古い柱をもとに、当時の間取りが復元されています。門の両側には、奉公人の居住場所と厩があります。奉公人の居住場所には木床と囲炉裏があり、厩には「土間」（土を積んだ床）があります。

当時は、長屋門の門部分の両側に入れられていた石垣は、加工をされていない天然石を積み重ねた「野面積み」のみが許可されていました。これは、不揃いな石の線によって容易に見分けられました。しかし、実際には、この規則は守られていませんでした。現在復元されている長屋門は、石垣に亀の甲羅の形をした薄い石が貼られています。これは、当時の実際の石垣だった、切り石をきれいに積み上げた「切石積み」に見た目を似せるためです。